

論文審査の結果の要旨

氏名 鈴木 健郎

白玉蟾は中国・南宋時代の道士であり、金丹道（いわゆる全真教南宗）の大成者として知られている。思想史的には、唐代以来展開してきた内丹説（薬物の服用によって不老不死を求める外丹に対するもので、体内の気を操作することで「道」と一体化し、永遠性を獲得することを指向する）に禅宗の理論を取り込み、更にそれを神霄派の雷法（雷神を使役する法術）と結合させて、高度に理論化された体系を構築することで、その思想は道教の重要な要素となった。本論文は、白玉蟾の多くの著述を詳細に検討することにより、その思想の構造と特徴を抽出し、あわせて“神秘主義”“呪術”といった概念と対比することによって、宗教学における位置づけを試みたものである。

論文は七章から構成されるが、白玉蟾の生涯を概述した第一章と結論に相当する第七章を除けば、二つの部分に分けることができる。前半は白玉蟾に影響を与えた諸派の思想・文献の研究である。第二章では内丹の技法を具体的に構築した鍾呂派の文献が極めて詳細に検討され、それが「道」を本源とする生成を逆行して「道」に回帰するものであったとされる。第三章では実体的な本源の存在を否定する仏教の「空」や禅の思想が取り上げられ、「心」の実体性に関しては仏教の中でも一定の振幅があり、道教的な本源論にも親和的な一面があったと指摘される。第四章では鍾呂派の内丹説と禅を結合させた張伯端の『悟真篇』が分析され、内丹によって本源への回帰を行った後、禅によって実体への執着を去るという、相補的な位置づけが存在したとされる。論文後半は白玉蟾の文献自体が俎上にあげられ、第五章ではその内丹説が、第六章では雷法が分析される。白玉蟾においては内丹と禅は等しいものとして結合され、そのため本源への回帰と実体性からの超克が一定の揺れを伴いつつ共存しているが、主たる方向としては現象による束縛を離れた「心」の自由を獲得することで、「造化」の作用に参与し、神々をも含む現象に対する主宰者となるという、「往還的ダイナミズム」として要約することが可能である。

本論文は、特に第二・五・六章において文献に対する分析があまりにも詳細であり、論文としては決して読みやすいものではない。また、文献の読解においても疑義の存する箇所が散見する。かつ、文献の分析に頁を裂きすぎたため、白玉蟾の思想を広く中国思想史や宗教学の中でどのように位置づけるかという大局的・理論的な議論が充分ではなくなったという嫌いもある。しかし、内丹に関わる文献をここまで丹念に読みこなしたことの意義は大きく、この分野における基礎研究として高度の参照価値を有すると思われる。また、禅宗との対比において内丹の諸説を類型化したことは、道教史は勿論のこと、宗教学に対しても貴重な貢献をなすと考えられる。

以上から、本審査委員会は十分に博士（文学）の学位に相当すると認めるものである。